

丸の内
地球環境倶楽部

2009.11.20

No.02

環境サロン 日本文化から学ぶ環境力

高度に発達した科学技術・巨大化した経済・複雑化した社会の課題解決の考え方を
日本文化から獲得し「環境力」を高める試み

Report

機械論的世界観から生命論的世界観へ 「愛づる」をキーワードに価値観の転換を

中村 桂子 氏

JT 生命誌研究館館長

<http://www.brh.co.jp/>



人・自然・人工の関係を再構築すべきとき

私たち人間の歴史において、人、自然、人工、神の関係はどのように変化してきたのか。人間が地球上に登場してきたとき、当然ながら、そこには人工物はなく、自然しかなかった。そうした神話的な時代の人間は、生命を基盤として生きており、自然に対する畏怖というアニミズム的な気持ちをもっていたはずである。

ギリシャ時代は理性を基盤とした時代であり、神が登場した。だが、この時代の神は酒を飲んだり闘争をしたりという人間に近い存在であった。いわば、自然と人を取り持つ存在として神があったといえよう。

中世になってキリスト教社会になると、神が独立して絶対的な存在となった。そして、人は神によって特別なものとしてつくられ、自然は「人間につくってやったものだから、どんな使いなさい」と神に与えられたものだとした。神と人、自然が、それぞれ独立した存在となったのである。

近代になると、科学が神の存在を抹殺した。人が自然を支配して、その間に人工をつくりあげた。たとえば、自然の寒さを避けて、密閉した家で暖房にあたることから、すべて密閉し、気候のよ

生命 (神話)	[自然・人] アニミズム
理性	ギリシャ (プラトン) イデア
	中世 (スコラ・キリスト教) 神
	近代 (科学) 啓蒙理性
生命 (新しい神話)	[自然・人・人工]

「人、自然、人工、神」の関係の変化

科学技術万能の考え方から脱却する

価値観を変えるのは難しいと言われる。だが、歴史を振り返ると、それはいくらかもある。人間性に注目して、価値観を変えた例としてルネサンスを見たい。西欧の例だが、科学技術を中心とした歴史を扱う場合、西欧で考える必要があり、しかも現代とつながるのでこれで考えたい。

ルネサンスは人間復興といわれるが、どんな意味を持っていたのだろうか。私が共感している塩野七生さんの説によれば、ルネサンスには重要な人物が二人いるという。一人はアッシジの聖フランチェスコ、もう一つは神聖ローマ皇帝フリードリッヒ（フェデリーコ）2世だ。

聖フランチェスコの業績で注目すべきは、それまでラテン語で行われていた説教をイタリア語に変えたことである。誰にも意味がわかるようにしたのであり、これは情報の共有という点で重要であった。

フリードリッヒ2世は、宗教的権威や支配から自由な立場をとった人として知られている。そうした立場は、イタリア語でライコ (Laico) と呼ばれており、「私たちがやることを、すべて神にゆだねるのではない」という考え方だ。

それによって、神をかさに権威をふりかざしていた教会の抑圧から逃れることができた。つまり、人間性を復興するには、情報を共有して教会の権威から解放される必要があったわけである。

そして今、科学技術が当時の神の立場にある。科学技術自体はけつして悪いのではないが、それを権威にしてしまっているところがある。第二のルネサンスとして、私たちが価値観を変えるには、そうした科学技術万能の考え方から脱却し、科学技術を相対化し、情報を共有する必要がある。それができて初めて、生きものとしての人間が回復される。

神から解放された人間をつくったのが第一のルネサンスならば、生きものとしての人間を回復するのは第二のルネサンスと呼んでもよいと思う。

塩野さんによれば、第一のルネサンスが成し遂げられたとき、人びとは「なぜと問い自分で考える」ようになり、「善・悪を自らの中に引き受ける」ようになったという。それまでは、「よいものは神さまのおかげ、悪いものは悪魔のせい」と考えていたが、それを自分で判断して選択するようになったのだ。そこで生まれたのが「精神的に強い人間」である。今まさにこれが必要だ。

いときも大気と接しない建築にまでなってしまうた。

だが、人間が自然をすべて支配しようとする文明にはもう限界が見えている。そこで、CO₂を25%減らすとか、生物多様性を尊重するといったも、技術だけで、その実現は難しい。生命を基盤にして、人と自然と人工の関係を再構築する必要がある。それは私たちの価値観を変えることである。生命を基盤とした「新しい神話の時代」と書いたが、これはこれまでの自然や人間の理性を基にした物語をつくるという意味である。

機械論的世界観は終わった

今提案したいのは、第二のルネサンスを成し遂げて、新しい「自然・人・人工」の関係を組み立てることである。そして、それを後押しするかのようには科学は大きく変わりつつあり、世界観が根本から変化しようとしている。

科学史家の伊藤俊太郎氏によれば、17世紀の科学は、ガリレイ、ベーコン、デカルト、ニュートンらによって機械論的世界観をつくりあげてきた。ガリレイは、「自然は数字で書かれた書物」と表現し、すべてが数式で理解できるとした。ベーコンはそれを受けて「自然の操作的支配」ができることと述べ、デカルトは人間は機械の一つと見る。ことができるとした。ニュートンは粒子論的機械論を唱え、自然も人間も、分子、原子、ニュートンノへと分解していくことですべてが解明されるという立場をとった。

こうした「機械論的世界観」の基本的な発想は、世界は確固とした存在であり、すべてが分析可能だというものだ。これは大きな成果をあげたが、現代の科学者は「機械論的世界観は終わった」と考えている。

では、そのあとでどのような世界観があるのか

といえ、それは「生命論的世界観」ではないか。その根本は、「自然は生まれるもの」という世界観である。

宇宙物理学では、宇宙は「無」から生まれたという。ただし、ここでいう「無」は、現代科学で理解や分析ができないという意味。そこから出発して、10のマイナス36乗秒という極めて短い時間に宇宙が生まれ、その後インフレーションという広がりがあつて、ビッグバンが発生。今も宇宙は膨張し続けている。

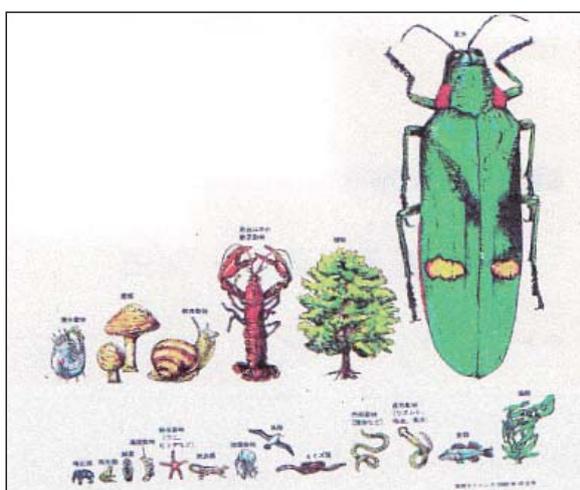
宇宙は機械のような不変の確固とした存在ではなく、生まれてきて変化する存在であるということである。しかも、それによって明らかになったのは、私たちが知っている酸素や炭素といった物質は、全宇宙の4%にすぎないということ。それ以外は、なにかよくわからない暗黒物質がほぼ20%。残りの75%が、「暗黒エネルギー」だということである。よくわかってみると、わからないことがたくさん出てくるというのが自然であり、それをまた解いていくのが科学の面白さである。

「愛づる」を新しい価値観の基本に

自然に眼を向けるといっても、太古の昔に戻っ

て人間が自然のなかで暮らすのは不可能である。道具をつくるのは人間の特性であり、69億人は人工なしには暮らせない。とはいえ、私たちは人工だけでも生きられない。そこで重要になるのは、自然の理解である。

熱帯林における重要な植物として、ある種のイチジクの木がある。一年じゅう実がなっているの、虫や鳥や動物の食料になるからだ。その実を割ってみると、1.5ミリほどのイチジクコバチをよく見かける。実のなかに卵を産み、幼虫が実を食べて育つのだ。交尾を終えたメスのコバチは、花粉を抱えて外に出ていく。そうして、つねにコ



「生物の多様性」のほとんどが昆虫類と植物

バチが入りしているの、イチジクにはいつも実がなっているわけだ。そう考えると、熱帯林にある億単位の木は、この1・5ミリのコバチが育てたといっても過言ではない。

生物多様性ということばが最近になってよく使われるようになったが、その多様性のほとんどが昆虫類と植物であるという事実を知ると、自然の見方ができてくるのではないだろうか。ペーコンは「自然の操作的支配」と、人間が自然を支配できると言ったが、本当に驚くべき仕事をしているのは虫であり植物なのである。彼らがいなければ森も酸素もできないのだ。私たち人間は、けつして神に代わる存在ではなく、彼らとともに生きていく自然の生きものの一つであるという視点を忘れてはならない。

こうした私たちを含む自然を見るときに、私が生命誌研究館の仲間たちと共有しているキーワード「愛づる」ということを紹介したい。これは、堤中納言物語に登場する「虫愛づる姫君」に由来している。このお姫さまは当時としては破格で、男の子たちに虫を集めさせては、かわいがっている。周囲の大人は困惑しているが、この姫君は「みんなは虫を醜いというけれど、育ったらきれいな蝶になる」と反論する。確かに、蝶となっ

てからの命ははかないものであり、本当の生きる力をもっているのはこの虫ではないだろうか。そう思っただけで見つめると、虫をかわいいと思うのはうなずける。

この姫は眉をそらず、お歯黒もしない。髪がじゃまだといって、髪を耳にかけける。どれも当時としてはありえない行動だったが、今の私たちの目から見れば、これこそが本当の意味のナチュラルリストではないか。こういうお姫さまが千年前の日本にいたというのは素晴らしい。

「愛づる」は単なる「愛」ではない。ものごとをよく見て、それに対する理解が深まった結果、



本当のナチュラルリストだった「虫愛づる姫君」

深まる愛情のことである。いわば、非常に知的な愛といつていい。日本の自然がこのお姫さまを生んだのだと思う。

科学技術は私たちの生活を支えるもので、それを否定するつもりはない。しかし、私たちの価値観を変えずに、このような技術と暮らし方を進めていくことはできないし、それが幸せではない。新しい価値観の基本に据えるべきなのは、このお姫さまのように、自然をよく見て理解を深め、それを愛しながら、そこにある知恵を引き出していくという「知」ではないか。その「知」をベースにして、環境に対応した新しい暮らし方を生み出すことこそが、今こそ求められているのだと思う。